

(仮称)

## ゆきのさと自由が丘通信

《2020年4月、小学校開校をめざして》

認定 NPO 法人北海道自由が丘学園・ともに人間教育をすすめる会 / 「自由な小学校」をつくる会  
 札幌市豊平区月寒東 1-15-5-11 ☎(011)858-1711

## 「きのくに子どもの村」を学ぶ！学習会の報告

&lt; 2017.10.15 道新記事 &gt;

10月21日(土)15:00～月寒子ども館での学習会は、横井敏郎さん、太田一徹さん、二階堂充さん、加藤裕明さん、吉野正敏さん、細田の6名参加でした。テキストで学習というより、9/2講演会の感想から、「きのくに」ではプロジェクトから学びを見とって基礎学習につなげるにはスタッフの力量がかなり必要だろう、スタッフの学び合い・成長はどのようになっているのかという話題が出ました。さらに、日本の教育文化の弱さの中で、サマーヒルとは違う日本独自の、北海道ならわれわれなりの学校の在り方があるのだろうという話題になり、そして吉野さんからかつての廃校情報などが提供され、学校づくりの運動の進め方として、自治体・地域との関係・信用づくりの中から市民立・保護者立の学校をどのように作っていくかということについて意見を交わしました。結論というものはありませんでしたが、率直な考えを交わす座談会となりました。今後は、支持者のいらっしゃる幼稚園の保護者への説明会などを考えてみることにしようと思っています。



そのあとの懇親会は5名が参加。談論風発で、教育談義から演劇論、政治談議など、話はいろいろ広がりながらも、皆さん、今の社会の在り方をよりよくしていくにはどうしたらいいか、今の教育・学校をどういう方向にしていけるべきか、どう学校づくりを広げていくかということが話の根底にあり、熱い語り合いが続き、話が尽きないままに8時過ぎに解散ということになりました。だいたい2次会の方が盛り上がるというのが世の常ですね。ご都合のつかなかった方は、今度こそぜひどうぞ！

## 支持者、支援者の方々からの投稿

昨年12月の「きのくに」視察報告会に参加していただき、その後たびたび話し合いに参加していただいている方からです。藤田さんは、旭川の幼稚園「ぴっばら」にお子さんが通っています。

○藤田 香 さん

私は長らく、自分の人生を生きていないと感じていた。

子が生まれ、この状態を子に引き継ぐのは嫌だと思った。私は子に、自分は無力じゃないこと、あたたかい世界もどこかにある事を知ってほしいと思った。

そう思いながら子が2歳を迎えた時、友人に「森のようちえん ぴっばら」について書いてある記事を見せてもらった。ぴっばらは「褒めない、叱らない、認める」を大切にしている。と書いてあった。私は常々、褒めるというのはある種の支配的なコントロールだと感じていたし、叱るというのも随分と上から目線な気がしていた。そして誰しもが、ありのままの自分を認めて貰いたいのに、そうはされない世の中に生きづらさを感じているんじゃないかと考えていた。だから、この記事を読んだ時、ここで幼児期を過ごしてほしいと思った。

ぴっばらに親子共々通い出して4年、果たしてぴっばらは、本当にその通りの場所で、大人と子どもが同じ地平で遊び、ぶつかり、泣き、怒り、笑い合っているところだった。幼児教育という堅苦しいものでなく、ただ日々自分自身を生きている人達がそこにいる。そんなようちえんである。

子も私もここの居心地が随分良く、ここを出て公立小学校に通う事を、想像するのが難しい。

親のエゴかもしれないが、せめて子の自我が確立しうる10代になるまでは、自分自身を生きる事に、どっぷりと浸かって欲しいという思いから、自由な学校やホームエデュケーションについて考える日々である。

## あらためて、めざす「自由な小学校」のデザイン・イメージ

「自由は放縦ではない」(ニール)。私どもがめざす「自由な小学校」は、ほったらかしの居場所ではなく、あくまでも学校であり、それも認可の学校です。そして、まさにモデルとするのが25年前に「自由な学校」を実現させてしまった和歌山県の「きのくに子どもの村学園」です。それは、「学校」とい

うとき一般的にイメージする三つのものがない学校です。

1. テストも宿題もない。
2. 学年の壁がない。
3. 「先生」と呼ばれる大人がない。

1. テストがなければ子どもは勉強しないのか？それは、点数・成績によって子どもが格付けされ、それが進学・学歴取得のための持ち点となっているからです。テスト・成績が将来の職業・収入のための勉強の外的な動機・強制となっているのです。

「勉強していい点を取らないと、高い収入や安定した将来はない！」という切迫感が勉強の動機となっているのです。では、そうした脅しのような成績取得競争を強いなければ子どもたちは勉強しないのでしょうか？人間本来の知的欲求やものごとを成し遂げようとする意欲などを信頼して、そうした知性を刺激する題材や環境を用意すると、子どもたちは自ら学ぶようになるはず。それはくどくど説明・説得するまでもなく、「きのくに子どもの村学園」の子どもたちの姿こそが、他に代えられない証明になっています。

2. 学年の区別は必要ないのだろうか？子どもたちの興味・関心は一律ではないし、成長、学びの進み方も一斉ではありません。さまざまな子どもたちを年齢という基準で外的にカテゴリー分けする理由

は何でしょうか。便宜でしかないではありませんか。特に低学年で、早生まれの子が不利になるという事実をよく耳にしませんか。ものごとの理解について、その時期もペースも一定ではなく、視覚的、聴覚的、体感的理解などさまざまなタイプの子どものいます。「きのくに」のプロジェクト学習では完全縦割り、基礎学習では原則、上の学年と下の学年に分けていますが、できるだけ体感的に学び、聞き合い、教え合い、協同的に学び、それぞれのペースで伸びていくようになっています。

3. 「先生」という指導者がいなくて教育が成り立つのか？一般的な学校では「先生」は、子どもたちを評価し格付けする権威者になっています。「自由な学校」では、子どもたちは自ら学



ぶので、大人たちは、その学びのための題材や環境を用意し、見守り、寄り添い、ときに刺激するスタッフとなるのです。また、一緒に生活を送る共同体の一員でもあります。だから、全員で話し合うミーティングでは子どもも大人も一人一票であり、日常生活では大人も「〇〇さん」と個人名、あるいはニックネームで呼ばれるだけなのです。

その他、もちろん制服もチャイムもありません。堀さんは冗談で「『きのくに』にはお金もありません」と言っています。

こうした学校では、感情面、知性面、人間関係の自由が大事にされます。興味のある活動に楽しく取り組むことで、知性が育ち、自己肯定感が生まれ、自分が好きな子は他の子を思いやることができますから、いい人間関係が生まれることになるでしょう。

「今だけ、金だけ、自分だけ」の価値観という意味で自発的な「グローバル人材」が将来の世界や日本をリードし、その他大半の国民は権力に阿る従順な羊でいい、と考えられているのが今の教育の主流な方向ではないでしょうか。そんな偏狭で、指示待ちで、自己利益ばかりを追求するような若者ばかりが育てば、社会はますます格差が広がり、自己責任の名のもとに弱者が見捨てられ、妬みと憎悪が溢れる世界になってしまうのではないのでしょうか。これからの社会を、多様な人たちが互いに認められ、一人一人がやりがいを感じ自分の仕事や生き方に誇りが持てる、思いやりのある世界にしていかななくてはならないのではないのでしょうか。そのための「自由な教育」「自由な学校」だと思います。そして、そもそも子どもたちが、生き生きと楽しく学び生活できなければ、何が学校、何が教育でしょうか。「きのくに」も、私たちが思い描く「ゆきのさと」も、決して特別ではない、ごく真っ当な学校です。

## 今後の活動の展望！

お金がない、土地もない、校舎もない。あるのは確かな理念と意志と、これまでの地道な実践の蓄積と、若干名だけ力強い支持者、支援者のみなさんだけです。でも、「きのくに」はできたのです。けっして夢物語ではありません！とにかく口コミ、炉辺談話、お仕事で企業と接する何気ない場面でも、いろいろな方に呼び掛けお誘いし、活動を広げることにご協力ください！共に頑張りましょう！

### 《希望と展望のイメージ》

- |       |    |  |
|-------|----|--|
| 2017年 | 冬  | 学習会、説明会など  |
| 2018年 | 春～ | 共鳴・支持者、支援者拡大。支援企業探し。 学習会、サマーキャンプ？<br>「きのくに子どもの村学園」視察。 設立場所選定。認可に向けて計画。 |
| 2019年 | ～  | 認可申請、具体化、開設準備。   |
| 2020年 | 春  | 小学校開校！   |